

女性スポーツの変遷とその捉え方に関する歴史的研究
～第二次世界大戦前における女性スポーツ状況に着目して～

A Historical Study on Changes and Representations of the Women's Sport
～Focus on the Situation of pre-World War?～

1K05B132

高橋 麻実

指導教員

主査 友添秀則先生

副査 宮内孝知先生

＜序章＞

現在、女性のスポーツ参加は当たり前のものとなった。しかし、野球・サッカー共に女性のプロ組織はなく、学校体育をみても、履修する種目が違うといった扱われ方の違いがある。未だに性別の違いによる制約が存在しているにも関わらず、スポーツの世界では男女平等が果たされたかのように捉えられることがある。このような現状から、今一度、女性スポーツの歴史を整理し、その中で女性はどう扱われてきたのかを捉える必要があると考える。女性と男性の違いによってスポーツとの関わり方に差異が生じるのはなぜなのだろうか。女性のスポーツ参加の歴史には、現代につながる視点の集積があるに違いない。そして、その集積を把握することは、現代から未来に向けて、女性のより豊かなスポーツ参加と、スポーツが多面的で多様性のある自己を実現する場であることへの可能性を考える事につながるはずである。そう思いこの研究を卒業論文のテーマとするに至った。本研究の目的は、女性スポーツの歴史とその捉え方の変遷を明らかにし、その歴史を再構成する事である。

なお、本研究は文献講読を中心とした文献研究である。

＜第 1 章＞

女性のスポーツ参加の歴史は「既存の男性たちの競技の世界への参入」と表現される。第 1 章では、女性スポーツの変遷を考察するにあたって、前提となる近代スポーツの成立と発展を検証する。

近代スポーツは、背景となった近代産業社会の特性を反映する鏡であるかのように、近代合理主義的な性格を内包していた。また男性が主導する形で形成されたことから、近代スポーツは近代産業社会の男性規範・男らしさを反映する男性の文化として発展してゆく。すなわち、女性が競技スポーツに参入する以前に「既存の男性たちの競技の世界」は確かに形成されていたのであった。

＜第 2 章＞

「既存の男性たちの競技の世界」に女性はどうのようなプロセスを経て参入を果たしたのか。第 2 章では、第二次世界大戦までの女性スポーツの歴史の変遷を、世界及び日本にわけてみてゆく。女性は近代スポーツに参入した当初から娯楽スポーツまたは遊戯において、社会的にも承認され活発な活動を行っていた。しかし競技スポーツにおいては批判が大きく、参入には抵抗が生じた。つまり、戦前、女性のスポーツ参加に関しては社会が求める女性規範が存在し、またその規範は女性を抑制する装置として働いていたのである。

＜第 3 章＞

近代スポーツはその発展の初期から、男性規範と女性規範の相容れない 2 つの規範を含み持っていた。このダブル・スタンダードの存在は、時代によって形を変え、時として女性を排除し、時として男女を分離する機能として働いていた。過去から現在にかけて、女性のスポーツ参入の歴史

はダブル・スタンダードとのせめぎあいと呼べるものであった。そして、現在から未来にむけても、性を男女の2つのカテゴリーに分ける価値体系が絶対視される限り、ダブル・スタンダードとの関わりは続くであろう。

＜結章＞

今後、女性がより豊かなスポーツとの関係を結ぶためには、ダブル・スタンダードが抑圧的に働く事態を防ぐ必要がある。そのためには、ダブル・ス

タンダードの存在が生み出す抑圧的な場面に意識になること、男女が同質の目的や結果を追求できるような環境を提供し「等しい尊敬と配慮」がなされるようにすること、また多様な選択肢を作り出し、男女という性別に関係なく、自立した個人の意思によって選び抜かれたスポーツ活動が自己のアイデンティティ発揮の場になるように、開放的で寛容な社会の視線から容認されることが必要となるであろう。こうして女性とスポーツとが将来にわたってより豊かな関係を結べることを望む。